

令和5年度 病弱グループのまとめ

1 研究主題 「自己理解を深め、自己選択・自己決定力を高めるための支援の在り方について」

2 研修内容

	日時	内容
第1回	5月12日(金)	協議 ・グループの研究主題と研究の進め方について
第2回	6月16日(金)	協議 ・実践事例様式とグループの視点について ・障害種別研修会の講師と講話の内容について
第3回	7月5日(火)	事例検討(2名)
第4回	8月1日(火)	障害種別研修会「心に悩みを抱える児童生徒の支援について」 富山大学 人文学部 教授 喜田裕子 氏
第5回	9月13日(水)	事例検討(3名)
第6回	10月3日(火)	事例検討(3名)
第7回	11月1日(水)	協議 ・学校訪問研修会グループ別研修会の協議内容と進め方について
臨時	11月15日(水)	学校訪問研修会打ち合わせ
学校訪問	11月17日(金)	協議 ・病弱生徒の関わり方について、実践事例のまとめ
第8回	12月6日(水)	協議 ・今年度の研究のまとめ ・専門性セルフチェックシートについて
第9回	1月10日(水)	協議 ・次年度の研究方針について
第10回	2月15日(木)	協議 ・次年度の研究の進め方について

3 今年度のまとめ

教師と共に、自己理解を深め、個々の実態に応じた多様な方法で自己選択・自己決定する機会を通し、自分の思いや意見を適切に表現できるように成功体験を重ねることで、将来に必要なコミュニケーション能力を育むことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

実践では、自己理解や自己表現の視点、キャリア発達の視点で指導・支援を考えて検討してきた。対象児童生徒が安心できる環境設定や言葉掛けをしたり、興味や関心がある話題を取り上げたりすることで、自信をもって他者と関わり、積極的にコミュニケーションをとる姿がみられた。さらに、児童生徒の将来の姿を見据え、現在の発達段階に応じたコミュニケーションに必要なスキルを探って実践に取り組むことで、身近な教師に自分の思いを適切な言葉で表現したり、自分の行動を考えて選択したりすることにつながった。今後は、児童生徒自身の教育的ニーズを捉え、自分に合った方法で様々な場面でも自分の思いを発信できるように、関係者と連携を図りながら支援について考えていきたい。

4 次年度に向けて

研究主題「自己理解を深め、自己選択・自己決定力を高めるための支援の在り方について」を次年度も継続して取り上げ、連続性のある多相的多階層支援「Co-MaMe」(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所)を参考に、対象児童生徒の実態と教育的ニーズを的確に把握し、「場面設定の工夫」や「チームとしての取組(関係者との連携)」をポイントとした支援の在り方について研究を進めていく。

- ・1学期:対象児童生徒の実態、教育的ニーズの把握を、グループ研修で行う。
- ・2学期:各自、実践事例に取り組む。また、事例を持ち寄り、グループで検討する。

令和6年度 病弱グループのまとめ

1 研究主題 「自己理解を深め、自己選択・自己決定力を高めるための支援の在り方について」

2 研修内容

	日時	内容
第1回	5月10日(金)	協議 ・グループの研究主題と研究の進め方について 研修 ・連続性のある多相的多階層支援「Co-MaMe」(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所)について(※以下「Co-MaMe」)
第2回	6月13日(木)	協議、研修 ・児童生徒の実態、教育ニーズの把握
第3回	7月31日(水)	障害種別研修会「病弱生徒の支援について～自己理解を深めるためには～」 富山大学 人文学部 教授 喜田 裕子 氏
第4回	9月13日(金)	協議 ・事例検討1回目
第5回	10月18日(金)	協議 ・事例検討2回目
第6回	11月29日(金)	協議 ・今年度の研究のまとめ、2年間の研究のまとめ
第7回	2月4日(火)	協議 ・次年度の研究の進め方について

3 今年度の成果と課題

昨年度の研究では、実践を通して、児童生徒は限定された個別の場面では自分の思いを表現できるようになったものの、他の授業や集団等の場面においては学んだことを生かして主体的に表現するまでには至らなかったことが課題として残った。

そこで、今年度は、「Co-MaMe」を参考に、対象生徒の実態と教育的ニーズをよりの確に把握し、「場面設定の工夫」や「チームとしての取組(関係者との連携)」をポイントとした指導・支援の在り方について研究を進めてきた。グループ全員で多角的な視点から対象生徒の実態や教育的ニーズを把握することで、それらに応じた段階的な指導・支援を考え、さらに学部全体でその指導・支援についての共通理解を図ることができた。生徒は段階的に必要な手掛かりを基に、繰り返し自分の思いを発信する機会があることで、様々な場面で表現することができ、経験を通して自己理解を深めていくことができた。

今後は、生徒が自分の変容について自分自身でフィードバックを行い、将来に向けて自信をもって自己選択・自己決定できるような指導・支援の在り方を考えていきたい。

4 研究のまとめ

児童生徒自身が自己理解を深め、自分に合ったコミュニケーション方法を見付けるために、実態把握をより丁寧に行い、教育的ニーズを的確に捉え、関係者と連携を図りながら様々な場面で自己選択・自己決定する機会を設定することで、自分の思いを主体的に発信できるのではないかと仮説の下、研究を進めてきた。

2年間の研究を通して、対象生徒の実態と教育的ニーズに関する心理面や学習面、生活面、自己管理面等について、多角的な視点で把握し、本人の将来の姿を見据え、現在の発達段階に応じて、どのような指導・支援が必要か、どのような場面が設定できるかを考え、教員間で共通理解を図り、連携して指導・支援を行うことの大切さを改めて感じた。さらに、児童生徒に対して安心できる環境設定や言葉掛け、興味や関心がある話題を取り上げることが有効であることが分かった。

今後、将来の社会自立に向けて、必要なコミュニケーション能力を高め、良好な人間関係を築くことができるように、児童生徒に寄り添いながら、教師一人一人が自らの指導・支援を振り返り、チームとして児童生徒の指導・支援に取り組んでいきたい。